

☆小倉中央小 学校通信

目指す児童像 ☆自ら学び考える子ども

☆心身ともにたくましく健康な子ども

1月18日第15号 ☆礼儀正しい子ども

発行所 北九州市立小倉中央小学校 小倉北区堺町二丁目4番1号 TEL 093-521-1079 発行者 校長 日高辰司

平成27年度 全国学力・学習状況調査の結果の報告と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成27年4月21日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語・算数・理科)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科・領域も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 教科に関する調査結果の概要

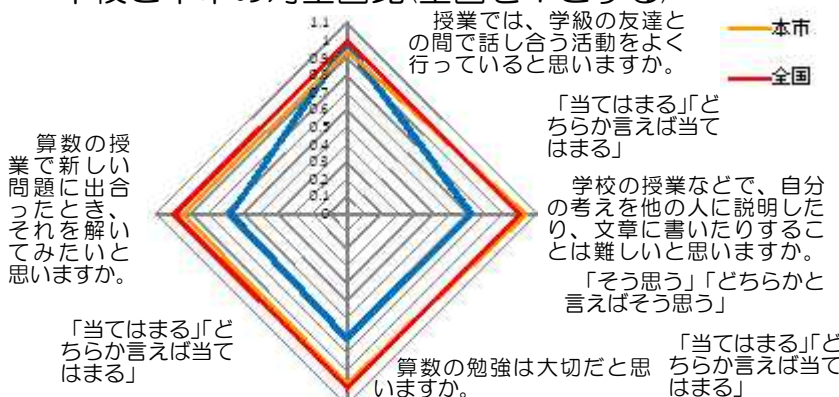
① 学力調査結果と分析

カテゴリー	全国平均との比較	学力調査の分析(傾向や特徴)
国語 A	全国平均正答率を下回っている。	<ul style="list-style-type: none"> 全国平均正答率を下回っており、全体的に無解答率が高い。特に漢字を書く力の定着が不十分で、無解答率も高い傾向がある。 選択式の問題と比較すると、短答式の問題を苦手としている。 説明文の文章の書き方の工夫として、適切なものを選択する問題は正答率が高かった。 新聞のコラムを読んで、表現の工夫を捉える問題は、正答率が低かった。
国語 B	全国平均正答率を下回っている。	<ul style="list-style-type: none"> 全国平均正答率を下回っており、記述式の問題の無解答率が高い傾向がある。 記述式の問題を苦手とする傾向があり、自分の考えを文章化する力をつける必要がある。 目的や意図に応じ、新聞の割り付けをする問題は、無解答率が低かった。 声に出して読むときの工夫とその理由を記述する問題は、無解答率が高かった。
算数 A	全国平均正答率を下回っている。	<ul style="list-style-type: none"> 全国平均正答率を下回っており、特に図形領域の問題の正答率が低かった。 数と計算領域の正答率は向上しており、5年3学期の朝自習で、集中的に計算問題の復習を行った取組が効果的だった。 小数や分数の減法の計算をする問題は、正答率が高かった。 式で表現された数量関係を図と関連付ける問題は、無解答率が高かった。
算数 B	全国平均正答率を下回っている。	<ul style="list-style-type: none"> 全国平均正答率を下回っており、記述式の問題の無解答率が高い傾向にある。 応用問題に苦手意識があり、問題をよく読み、粘り強く取り組む力をつける必要がある。 単位量あたりの大きさを用いて、目的に応じた買物の仕方を選択する問題の無解答率が低かった。また、長方形の面積を二等分する考えを基に、2つの図形の面積が等しい理由を記述する問題の無解答率については高かった。
理科	全国平均正答率を下回っている。	<ul style="list-style-type: none"> 全国平均正答率を下回っており、「エネルギー」「地球」区分の正答率が低かった。また、短答式や記述式の問題は正答率が低い傾向にあり、実験や観察の過程を文章で表現する力をつける必要がある。 メダカの雌雄を見分ける方法を選択する問題は、正答率が高く、無解答率が低かった。 水が水蒸気になる現象の名称を書く問題は、正答率が低かった。

② 学校における学習状況に関する調査結果と分析

- 授業での話し合い活動の機会は、ほぼ全国平均レベルだが、自分の考えを説明したり、文章化したりすることを苦手とする児童の割合は高いが、話し合い活動の中で根拠を示して説明する場面を位置づけていく必要がある。また、記述式の問題を苦手とする傾向にあるので、自分の考えを根拠を示して書く活動の機会を増やしていく必要がある。
- 算数に対する関心や意欲が低い傾向にあり、単元の導入の工夫や、生活と関連付けた応用問題の工夫を図っていく必要がある。

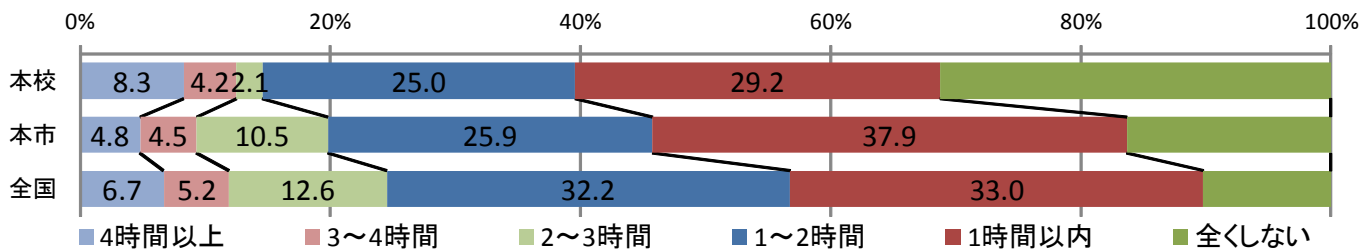
本校と本市の対全国比(全国を1とする)



2. 家庭生活習慣等に関する調査結果の概要

① 家庭学習習慣に関する調査結果と分析

土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらい時間、勉強をしますか。(学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間も含まれます。)

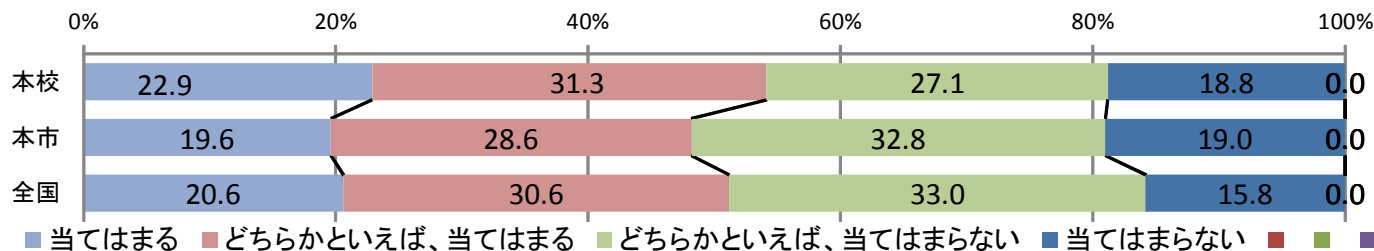


・毎週火曜日の読書タイムや、課題終了後の空き時間などの短い時間を利用した読書の習慣は定着しており、全国平均をかなり上回っている。しかし、昼休みや放課後、休日などにじっくりと読書に取り組むことが少ないようである。

・平日の家庭学習の時間は全国平均とさほど変わらないが、学校の授業の復習をする児童の割合が低い。また、学校が休みの日の家庭学習の時間が短い。以上の結果から、家庭学習の時間の目安や取り組む内容について全校的に知らせ、保護者の協力を得ていく必要がある。

② 生活習慣に関する調査結果と分析

友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意ですか。



・授業で話し合い活動の機会をもつようにしているため、自分の考えを発表することは得意な傾向がある。

・セルフイメージが低い傾向にあり、それが「人の気持ちができる人間になりたい」児童の割合の低さにつながっていると考えられる。

・校区外通学児童が多い事情もあり、地域行事への参加が少ない傾向がある。

3. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組

○算数科を中心に少人数指導の充実を図り、少人数指導教員や担任外教員を中心に、低・中学年での基礎的な計算の仕方を確実に身につけさせることに重点を置き、高学年では、図形領域の指導の充実を図る。

○単元や児童の実態に応じて、チームティーチングだけでなく、習熟度別や取り出し指導等の様々な授業形態で指導の効果を高める。

○朝自習プリント(北九州市算数研究会作成)やアシストシートを朝自習や家庭学習として活用し、基礎基本の徹底を図る。また、アシストシートや過去問題を冊子にして、冬休み・春休みの「宿題」とする。

○5年生の3学期に、朝自習プリント(北九州市算数研究会作成)に繰り返し取り組み、基礎・基本の徹底的な習熟を図る。

② 家庭生活習慣等に関する取組

○自主学習ノートの活用や家庭学習時間の設定、家庭学習の取り組み方について、11月の学年・学校通信や学級懇談会等を通じて全校的に保護者に啓発し、家庭学習への理解と協力を得るようにする。

○「家庭学習チャレンジハンドブック」の現存状況を把握し、内容をダイジェストした「小倉中央小家庭学習カード」を作成し、児童・保護者に家庭学習の時間や方法を周知する。

○朝食をとることの大切さについて、学校通信や保健だよりで啓発していく。

○中学校と連携して様々な教科で出前授業を計画し、中学入学後の学習や生活への見通しをもたせ、「中1ギャップ」の解消を図る。

